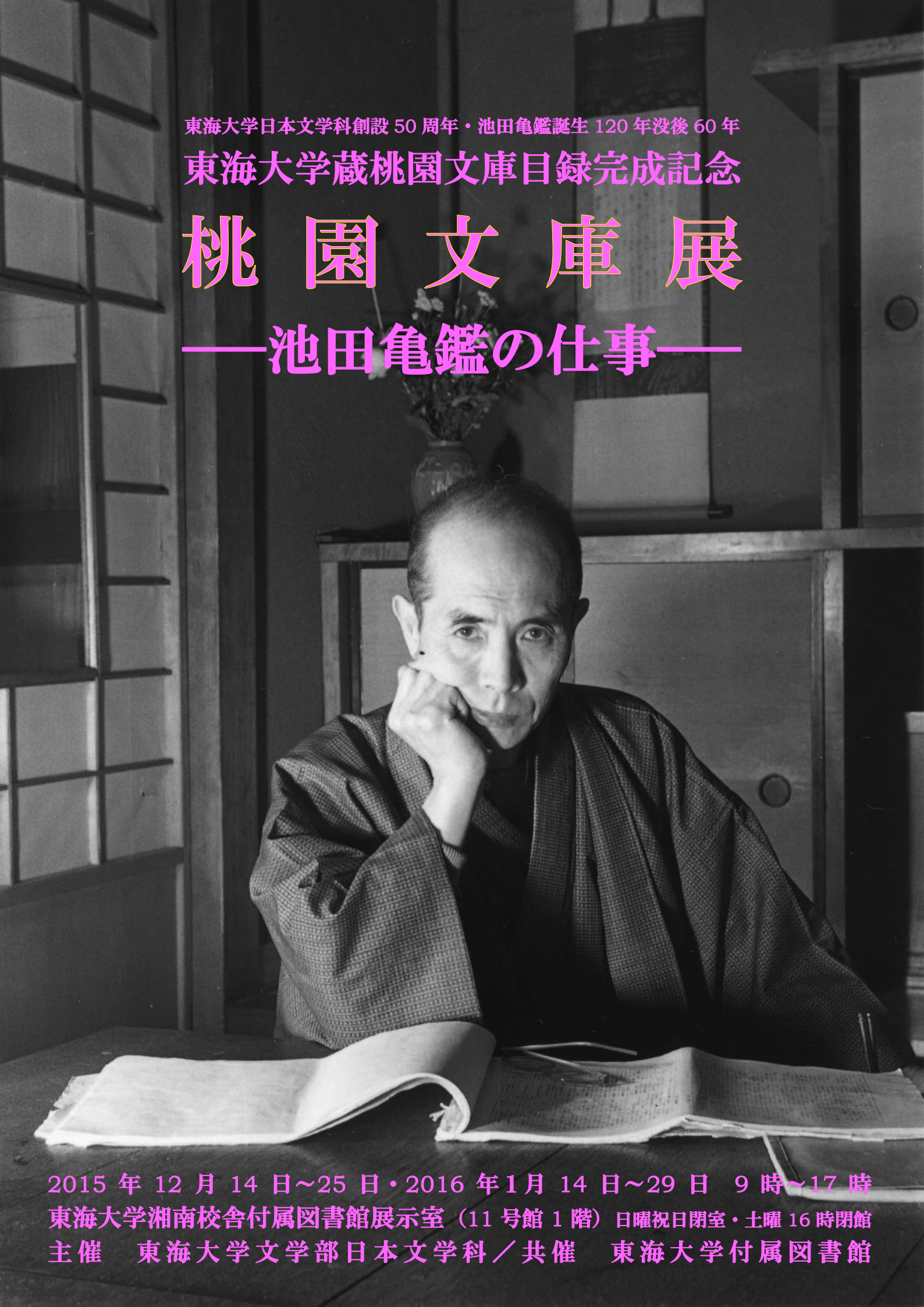


東海大学日本文学科創設 50 周年・池田亀鑑誕生 120 年没後 60 年
東海大学蔵桃園文庫目録完成記念

桃園文庫展

——池田亀鑑の仕事——



2015 年 12 月 14 日～25 日・2016 年 1 月 14 日～29 日 9 時～17 時
東海大学湘南校舎附属図書館展示室（11 号館 1 階）日曜祝日閉室・土曜 16 時閉館
主催 東海大学文学部日本文学科／共催 東海大学附属図書館



東海大学附属図書館（湘南校舎4号館）

文学部日本文学科創設 50 周年
池田亀鑑誕生 120 年没後 60 年
東海大学蔵桃園文庫目録完成記念

桃園文庫展

——池田亀鑑の仕事——

2015 年 12 月 14 日～2016 年 1 月 29 日
(12 月 26 日～1 月 13 日は閉室)

東海大学湘南校舎 11 号館図書館展示室

主催 東海大学 文学部 日本文学科

共催 東海大学附属図書館

展示目録・解説

2015 年 12 月 14 日発行

制作・著作

東海大学文学部日本文学科・東海大学附属図書館

ごあいさつ

日本文学科主任教授 志 水 義 夫

わたしたち東海大学の付属図書館には「桃園文庫」と呼ばれる有名な国文学資料の蔵書が保管されています。先年、その目録（『桃園文庫目録』上・中・下巻）が長い整理の末、完成しました。また今年、平成 27 年（2015）は戦後 70 年を始め、いろいろと周年記念が重なった年です。^{アニヴァーサリー}「桃園文庫」の整理と深く関わった文学部日本文学科も創設 50 周年となりました。さらに明年は「桃園文庫」の旧蔵者、池田亀鑑博士の誕生 120 年、没後 60 年を迎えます。そこで今回は、年をまたいで『桃園文庫目録』完成記念として、「池田亀鑑の仕事」をテーマに展示を企画しました。

池田亀鑑博士は古典文学の近代研究史上、ひとときわ輝く研究者です。その蔵書を本学で所蔵する経緯については、付属図書館でその保存に深く携わって来られた村山重治前図書課長が日本文学科が刊行する『湘南文学』49 号（平成 26 年 2014，編集：東海大学日本文学会）に詳細な記事を寄せられています。今回は村山前課長のお許しを得て、以下に掲載します（掲載された『湘南文学』第 49 号は、やはり桃園文庫と深く携わって来られた蟹江秀明元教授の退職記念号です）。

一昨年完成した『桃園文庫目録 下巻』は、古典籍の写本や江戸時代までの版本を中心として編まれた上・中巻に対して、残された洋装本（近代以降の刊本）や博士の書かれた原稿や研究資料について、整理し編まれたものです（編集の作業は、日本文学科の鍛冶光雄教授が中心となって行われました）。博士の学問は、それまでの国学的研究の伝統にドイツ文献学の^{テキスト・クリティック}本文批判の方法を享受して完成された、近代古典研究の基礎となる方法が示されたものです。その方法と成果は『古典の批判的処置に関する研究』『源氏物語大成』に結実されました。今回は、博士が研究の基礎とされた写本等に加え、研究資料や原稿、校正刷なども展示して、わたしたち日本文学科の専門とする日本文学研究がどのようになされるのか、その一面を見ていただこうと思います。あわせて東海大学が「桃園文庫」を単に所蔵・保管するのではなく、どのように世の中にその価値を還元しているかもご理解いただければ幸いです。

桃園文庫と桃園文庫目録

村山重治

『湘南文学』第49号（2014年11月、東海大学日本文学会）掲載

1 池田亀鑑博士と桃園文庫

池田亀鑑博士は1896年12月に鳥取県で生まれる。1923年4月に東京帝国大学文学部国文科に入学。「宮廷女流日記考」を卒業論文に1926年3月に卒業した。1942年に『校異源氏物語』が完成。1944年には『**古典の批判的処置に関する研究**』が日本文学報告会全国文学賞を受賞。1948年には同論文により学位が授与された。1956年12月には『**源氏物語大成**』が完成したが、同年12月19日、完成の年に急逝された。

池田亀鑑博士（以下亀鑑博士と云う）は、次々に研究論文を発表されるが、特に平安朝文学の代表作品の原典の再建を試みられ、新たに文献批判的研究という学問方法を樹立し、日本文学研究に一つの輝かしい時代を築いている。

その研究のために亀鑑博士が生涯にわたり、収集された資料が「桃園文庫」である。内容を見ると、研究の足跡を如実に物語っている。収集のいきさつなどは『一書肆の思い出』（反町茂雄著 平凡社 1986～92年刊）や『**花を折る**』（池田亀鑑著 中央公論社 1959年刊）などに記されているので参照されたい。

2 桃園文庫が東海大学の所蔵となるまで

『**桃園文庫目録**』上巻の「桃園文庫と東海大学付属図書館」（蟹江秀明教授著）に桃園文庫を譲りうけるまでの経緯など、以下のように述べられている。

東京豊島にある故池田亀鑑博士邸の桃園文庫を東海大学付属図書館原田敏明館長にお伴をして初めて訪ねたのは、昭和44年11月15日のことであった。原田先生（58年1月没）は妹君（37年4月没）が池田博士の夫人であった関係で、博士夫妻亡き後の池田家の遺族より文庫の移譲方を一任されていたのだった。（中略）昭和45年は新学期開始と同時に東海大学にも学園紛争の嵐が吹き荒れた年であった。ロックアウトに入った夏、松前総長と各学科の専任教員との意見交換の会が持たれることになった。この席で、かねて原田先生より相談を受けておられた日本文学科石井庄司主任教授から、桃園文庫購入についての希望が公式に出された。国文学にも造詣の深い総長は、この申し出を即座に快諾されたのだった。（後略）

そして1973年、東海大学建学30周年事業の一環として桃園文庫を購入することが正式に決定した。同年9月18日から三日間、延べ人数23名の図書館員が池田邸を訪れ、書庫内すべての資料の簡単なカード目録を作成する作業を行った。書庫内は、和装本・洋装本が整然と並んでおり、その和装本には「い」から「め」に分類され、亀鑑博士が自ら作成した手書きの書架目録が作成されてあった（桃47-479）。この作業は本学に搬入した後にも、池田家の書庫の配架を再現できるようカード目録の作成に配慮した。その後約一週間を費やし、カード目録から手書きのリスト「**桃園文庫書名総目録**」（桃47-480）を作成した。これら一連の作業は藤井茂利整理課長（後に鹿児島大学法文学部教授）の指導の下実施された。

この「桃園文庫書名総目録」との最終照合を神田の古書店「一誠堂」に同年10月19日に依頼、池田家と東海大学の間で正式に譲渡の契約が交わされた。同年11月には、三日間を要して、池田家から中央図書館書庫七層への移動が完了した。移動に際しては、ご遺族への形見ともなるべき亀鑑博士の著書類は残し、その他の全ての資料の移動が完了した。

3 桃園文庫の整理が始まる

私は1971年に東海大学職員として採用になり中央図書館整理課に配属となった。古典籍の知識や整理技術など皆無な状況であった。

当時の尚樹啓太郎館長、津金幹彦庶務課長、近松信也整理課長など多くの方々の理解を得て、私を含めた館員に古典籍の整理知識や整理技術を習得する機会を与えていただいた。また、参考となる図書館等の訪問にも柔軟に対応していただいた。訪れた図書館は、国立国会図書館、宮内庁書陵部、国立公文書館、天理図書館、足利文庫、金沢文庫などで、古典籍の保管や目録作成の基本的知識を多く学ぶことができた。特に天理図書館の目録については、奥書や識語を丁寧に採録しており、大変参考となった。また、同館は桃園文庫旧蔵の土佐日記関係の和装本が多く所蔵されており、興味深く見学させていただいた。

いよいよ整理着手となるわけだが、医学部開設を始め、大学院の新設等大学が拡充期に入り、図書館業務も繁忙の時期であったため、文庫の整理に集中できる状況ではなかった。このような状況の中、森睦彦整理課長補佐（図書館学教授兼務）は、白石真道先生からの寄贈本（江戸時代後期の版本を中心とした約3000冊）を使って、和装本の目録作成の基礎技術を館員に指導した。これは内閣文庫目録と照合し、書誌事項と内閣文庫の分類を目録用紙に記入するもので、後に森先生が添削指導する内容であった。現在整理係ではこの白石先生寄贈本の種々障害となっていた問題を解決し、整理に着手している。近々目録が公開され利用が可能となる見込みである。

1976年には、尚樹啓太郎館長の指示により、「桃園文庫整理準備委員会」が発足した。委員会は近松信也整理課長（教養学部教授兼務）を委員長に、日本文学科からは村瀬敏夫教授と蟹江秀明教授、図書館からは森睦彦教授と私が選出された。

第一回の委員会は同年5月10日に開催された。そこでは現実に文庫の虫損が進行しつつあったことが報告され、早急な燻蒸処理を優先したことが報告された（この燻蒸処理は購入翌年1974年9月1日から3日まで実施された。さらに、1981年8月8日から11日まで書庫七層全体の燻蒸も実施した）。

整理の手順としては、洋装本を最初に、次に和装本をそして原稿や資料類の順で整理を進めることにした。洋装本については、同年7月に整理が完了し、カード目録による検索も実現した。

第二回の委員会は同年7月に開催された。ここでは洋装本の利用が可能となったこと、文庫の所蔵件数、和装本約3000点、洋装本約6600冊、その他原稿類や調査資料が1500点であることが報告された。

第三回の委員会では、和装本の分類法が大枠で決定された。これによって和装本の分類作業が本格的に始動することになった。

図書館内の人事異動により、松村恭二氏が庶務課長、津金幹彦氏が整理課長となった。松村庶務課長には人的な配慮や予算の面など常に考慮していただいた。津金整理課長は、桃園文庫の整理を精力的に行い、1979年7月に「桃園文庫（和装本）目録—事務用」の編集・刊行となった。これは本目録を先駆けした整理・保管に便を図るため作成されたものであって、学内の関係部署のみ配布することとした。この頃から、津金氏は、書庫七層に閉じ籠って目録作成に集中する日々が続いた。まさに津金氏による奥書や識

語の翻字、さらにその結果や解説も記録として残された。後日の文庫目録の原稿作成において、基礎作りともいえる内容であった。

4 桃園文庫の本格的な整理作業と目録編集

1983年4月に目録編集・刊行の母体となる「桃園文庫整理委員会」が鈴木八司図書館長の指示により発足した。委員長に金子金治郎元東海大学教授、幹事に蟹江秀明教授、事務幹事に私、委員に津金氏、松丸克巳氏と整理課の館員二名が当ることになった。

第一回の委員会は同年5月11日に開催された。金子先生に指導をいただきながら毎週水曜日を作業日とする。目録の記述内容は天理図書館刊行の目録を参考にするなどが決定された。その後委員会は月一回の頻度で開催され、具体的な事例の報告と検討がなされた。その一部を紹介しておく。

青写真の資料について

青写真の扱いについては、化学分野の教員や近松先生に保存の対策について見解を求めた。マイクロ写真に撮影する案や保存方法など多くのアドバイスを頂いたが、決定的な解決策は見出せなかった。文庫の青写真の資料は比較的安定している事から、温度・湿度の管理を万全にすることと、複写機で複製し、それを製本し、現物と一緒に保管することにした。

目録の構成について

文庫目録の上巻は物語関係を中心に、中巻は随筆、日記、和歌など物語以外の和装本を中心に、下巻は上・中巻に収録されなかった亀鑑博士の発表論文、原稿、調査記録、研究資料、洋装本と上・中巻に収録された和装本の書誌項目からの書名・人名索引から成る三巻の構成とすることにした。

分類および請求番号について

目録上巻の分類は、古物語・擬古物語、中世小説、説話物語、歴史物語、軍記物語、仮名草子、その他の物語としたように桃園文庫の性格内容によって独自の分類とした。請求番号は保管や出納に便利のように資料一点一点に固定番号を付与することにした。

文庫目録の編集について

金子先生が目録上巻の「桃園文庫の性格と目録」に次のように述べられている。

（前略）目録の編集に当っては「桃園文庫」の蒐集に籠められた深い志に添うことを、終始念頭においてきた。そのための目録編集に次の方針を立てた。まず基本は網羅主義である。中世・近世の写本、版本の外に、資料蒐集の段階で、新たに写した新写本があり、また青写真で複写したものがある。これら新写本・青写本の原本は、その多くが古写本の貴重本であって、中にはすでに散佚したものも少なくない。その意味でこの目録には、新写本・青写本も網羅している。次に奥書・識語の類はできるだけ採録して、目録の上に載せるようにした。伊勢物語、特に源氏物語のように、収載部数の極端に多い本目録にあたっては、奥書・識語によって、系統や時期などが、幾分たりとも特定できるからであり、もう一つは、古典を享受伝承した古人の跡にも心を引かれたからである。三つめの方針として、博士が古写本など入手の都度、あるいは調査の後で、別紙及至書中に書き付けた覚書きがある。入手の喜びを記し、年代・類書・系統をメモするなど、内容は様々であって、いずれは著書の中で体系化されるものであるが、ここは博士の生の声があり、学問的息吹を感じさせるものがある。これももちろん採録している。（後略）

以上の事柄を目録編集にあたって念頭に置くべきと明確にされた。これによって、青写真、現写本（ペン写・鉛筆写を含む）も写本・刊本に準じた扱いにすることや、目録記載事項に奥書、識語、覚書、メモ

などもすべて採録することが委員会で決定された。

写年の規準

亀鑑博士がメモ等に残された「古写」の扱いに一定の基準は無かったように見受けられた。そこで文庫目録を整理する際には、室町時代は元弘(1331)～応永(1427)を室町初期、正長(1428)～永正(1520)を室町中期、大永(1521)～慶長七(1602)を室町末期とし、江戸時代は慶長八(1603)～貞享(1687)を江戸初期、元禄(1688)～安永(1780)を江戸中期、天明(1781)～慶応三(1867)を江戸後期として扱うことも決めた。

目録記入用紙の作成

目録の記載項目や記載順序の決定と同時に、本目録の編集を念頭においた記入用紙を作成した。用紙の下段欄外には記載項目のチェック欄を設け目録の記載に漏れが起こらないように工夫した。

目録記載と分類の誤り

文庫目録下巻の索引の編集時に翻刻や単純な転記の誤りが発見された。目録下巻の刊行時に正誤表を付して訂正を行った。その内正誤表で修正したものと、目録原稿入稿直前に修正したものを紹介しておく。

「堤中納言物語攷 ペン写 三卷三冊」(桃 11-50)

この書誌に大きな誤りがあった。これは松村誠一先生から指摘を受けたもので、図書館発行の広報誌に訂正文を掲載し、松村先生に訂正の旨を報告した。

正確には、「堤中納言物語攷 松村誠一著……」とし、さらに注として

松村誠一著「堤中納言物語攷 九冊」のうち第七・八・九冊に該当する「堤中納言物語校異」の転写本。この著者の凡例に「本書の底本は池田侯爵家蔵土肥経平旧蔵本である。此本を底本に選択した理由は影写に便である事と未紹介のものである事との二つ以外にない」とし、亀鑑博士が松村先生の著作を参考資料として転写した資料であると訂正した。(正誤表参照)

中巻の入稿直前に修正をしたのが以下の資料である。

「六親 写本 二卷二冊 (桃 26-17)」

私はこの資料を、女房奉書・女房消息の類と判断して処理をしていた。印刷原稿の提出直前に金子先生から、貴重な裏書を持つ古今集の注釈書で、内容は「六卷抄」ではないかとの指摘を受けた。鍛冶先生と金子先生のご自宅にこの資料を持参し訪れたのは陽も落ちた頃と記憶している。詳細に調査した結果「六卷抄」であることが判明した。この資料は後に、「桃園文庫影印叢書 六親」として採用したように、史料的にも大変重要な資料であった。金子先生がこの資料の解題も担当されているので参照されたい。

正誤表の通り翻刻の誤りが多くあった。請求番号の空番も散見されるが、完全な修正が困難であったとご理解いただきたい。

5 桃園文庫の整理を支えた人々

1983年4月から「桃園文庫整理委員会」の委員長として金子金治郎教授をお迎えして以来、先生は毎週水曜日には必ず書庫に入られ、資料の分類から目録の記載内容を一点一点現物と照合、点検される傍ら、我々館員の指導にも当って下さった。先生のご尽力なくしては、目録の完成は成し得なかったであろう。

金子先生をお迎えした時期と同じく、村瀬敏夫、堀越善太郎両教授から奥書・識語の解説のお世話になった。難解な蔵書印記については、大野峻教授の研究室や、鎌倉のご自宅まで何度もお邪魔をして御教示

いただいた。いつも帰りには「しっかり勉強しなさい。」と激励された事、今も心に残っている。さらに柏原司郎教授にも蔵書印記の解説にご協力いただいて、大半については解説できた。この時点でも解説できなかった印については「一印不詳」と目録に記した。

また金子先生の指導の下、博士課程を修了した諸氏の内、王淑英氏（現・韓国仁荷大学教授）と鍛冶光雄氏（現文学部日本文学科教授）の両氏には図書館員が採録した書誌事項の点検も含め、奥書・識語などの解説に大変な助力をいただいた。特に鍛冶先生とは、図書館が閉館された後も夜遅くまで夢中で作業を進める事が度々あり、書庫に閉じ込められた事もあり、今では懐かしい思い出である。鍛冶先生の献身的な努力によって目録が刊行されたと言っても過言ではない。

このように多くの諸先生方からご協力をいただいた。一方図書館では、通常の図書館業務の他に文庫整理のため多くの館員に尽力していただいた。

6 桃園文庫目録刊行と学外への文庫紹介

文庫目録上巻は1986年3月に、中巻は1988年3月に刊行することができた。刊行した目録は、池田家と亀鑑博士の直弟子や博士と縁のある方々で組織する「桃葉会」のメンバーに先ず寄贈した。図書館関係では、国立国会図書館をはじめ近隣の公共図書館、国文学を開講している学部・学科とその付属図書館に寄贈し、個人に寄贈することは原則行わなかった。

目録刊行に先立って、1978年4月から、本学の広報誌『東海』に「東海大学古典シリーズ」と題して、桃園文庫から貴重な資料を中心に紹介を開始した。第一回は「源氏物語桐壺の巻」として明融筆本を私が解題、順次図書館の館員が主に執筆し連載した。

1979年10月には、桃園文庫の公開に踏み切った。これは学外の研究者から桃園文庫の閲覧を強く求められたものであった。

1981年4月に湘南校舎11号館図書館が開館した。この図書館には展示室が設置されており、同年11月には付属図書館第一回図書展示会を開催した。以後図書館では年二回の展示会を企画し開催しているが、その大半は桃園文庫の資料を使ったものであった。

1995年1月19日から31日の期間、新宿・紀伊國屋画廊で「東海大学所蔵特別図書展—桃園文庫のなかの平安朝文学を中心として—」を開催した。

1997年1月16日から28日の期間には同じく紀伊國屋画廊で「東海大学特別図書展—桃園文庫のなかの徒然草展—」を開催した。初回の展示会には、伊勢物語、源氏物語、土佐日記など文庫の中でも貴重な資料を展示した。

二回目の展示会は徒然草展とした。徒然草は烏丸本系統、幽斎本系統、正徹本系統、常縁本系統の四系統が考えられているが、桃園文庫にはこれら四系統の伝本が揃っている。これらの写本を中心に刊本や注釈書などを展示した。二回の紀伊國屋画廊での展示資料の選定と、解説文の執筆は鍛冶先生と私が担当した。

展示期間には「桃葉会」の方々や一般の方々にご覧いただいたが、会場での説明や案内は私が担当した。また開催期間中、会場での受付や様々な対応を東海教育研究所の方々に援助をいただいた。

以上のように展示会や広報誌に掲載するなど、桃園文庫を学外の多くの方々に注目いただくよう、広報活動を展開して来た。

7 桃園文庫影印叢書の刊行

文庫目録上・中巻が刊行されたことで、洋装本と和装本の整理がほぼ完了したことになる。

日本文学科では桃園文庫の中から、特に貴重な資料を厳選し、影印本を作成する提案が出された。これによって「東海大学桃園文庫影印刊行委員会」が発足、委員に大学当局、図書館、出版会、日本文学科から選出された方々で準備を進めることとなった。影印となる資料は、鍛冶先生と私で候補資料 35 点を先行して選定した。解題をしていただく方の交渉、依頼は蟹江先生が担当した。その結果、亀鑑博士に最もご縁のある国文学者である石田穰二氏、稲賀敬二氏、寺本直彦氏、福井貞助氏に、本学関係者として、村瀬敏夫先生、金子金治郎先生、蟹江秀明先生と鍛冶光雄先生に解題をお願いすることになった。解題していただく先生方には候補資料の厳選と追加資料の確認をお願いし、26 点を採用する事になった。

「東海大学蔵 桃園文庫影印叢書 全十三巻」として、東海大学出版会から第 1 回配本「源氏物語(明融本)一」が 1990 年 6 月に刊行、13 回配本「徒然草二」が 1996 年 12 月刊行で完結した。(詳細は文庫目録下巻 目録の完成に当って——蟹江秀明著——を参照)

8 桃園文庫目録下巻の編集

文庫目録下巻には、和装本以外のすべての資料と、上・中巻の書誌事項にある書名、人名の索引を収録した。目録下巻は以下のような内容である。

亀鑑博士が雑誌などに発表した論文など 341 点、亀鑑博士に寄贈した諸研究者の発表論文など 220 点、海外で発表された書誌学に関する論文の翻訳資料 67 点、古典籍の部分写真資料 53 点、亀鑑博士が編集・監修に関わった国語科の教科書類 92 点、亀鑑博士の研究調査資料と発表論文の原稿など 538 点、洋装本 6647 冊、雑誌類 94 点となっている。

一方、池田家には亀鑑博士の遺稿や、諸研究者からの寄贈資料が残されていた。池田研二先生(亀鑑博士ご次男)が東京大学工学部を定年退職後、本学の開発工学部医用生体工学科教授として就任された。これを期に池田家に残されていたすべての資料を、研二先生手ずから整理し、これらを追加移譲して頂くことになった。目録下巻には、これらの追加資料も収録することができた。

私が図書課長を辞任した翌月、2009 年 4 月から、本格的な目録下巻の編集に入った。資料類の整理は私、索引の作成は鍛冶先生と分担し開始した。索引の編集には早乙女牧人氏と遠藤哲郎氏の両氏が加わり、大変な尽力をいただいた。

文庫目録下巻では特に索引の編集に苦心した。以下に例を挙げる。書名として「伊勢」と表記があった場合、文中などから判断して「伊勢(伊勢集)」「伊勢(伊勢物語)」のように補記して区別した。人名で藤原定家と姓名の表記があるものと、定家と名のみ表記があるものがある。この例のように著名人で特定しやすい人名は良いが、文庫目録の奥書・識語の表記から姓名を特定するのは困難であり、名で統一し「定家(藤原)」のように姓が判明するものは()の中に補記した。同一人名で、微妙に異なる「契沖と契沖」や「岸本由豆流と由豆留」などがあるが、このような場合は統一した。また配列は漢音ヨミの五十音順としたが、西行はサイギョウと読むのが一般であるが、全体を統一的に処理するためセイギョウと読み配列した。

以上のように索引の作業は多くの問題を解決しながら、長期にわたって編集作業を続け、2013 年 5 月に文庫目録は完結した。

9 文庫目録の記述から

文庫目録には和装本 3028 点が収めてある。目録の編集方針、網羅主義である事は前述した通りで、近世までの写本や版本の外に、新写本や青写真も和装本に準じて扱っている。目録には、青写、現写（毛筆による新写本）、ペン写、鉛筆写と表現した。これら文庫目録上・中巻の和装本の内訳は、写本 1181 点、版本 781 点、新写本 615 点、青写真 210 点、複製本 12 点、写真 6 点となっている。これら書誌事項の記述から、古典を伝承した様々な跡が見ることができるので一部を紹介する。

蔵書印記

蔵書印記は代表的なもののみ採録した。新写本で手写された蔵書印は、原本の所蔵を明確にするため「印の写しあり」と補記し他と区別した。以下に文庫の中の代表的な蔵書印について紹介しておく。

「池田氏蔵書」印

この印がある和装本は 60 点あり、桃園文庫のすべての資料に押印されているわけではない。洋装本にもこの印が押印されている資料が散見される。おそらく桃園文庫の初期に収集された資料に押印されたものと考えられる。

「青谿書屋」印

この印がある和装本は 42 点ある。新写本として青谿書屋本が原本となったのもこの他数点見られる。亀鑑博士の研究支援者として大島雅太郎氏や前田善子氏など、多くの方が居たが、一方では彼らの古典籍収集の指南役でもあった。大島氏の「青谿書屋」前田氏の「紅梅文庫」の蔵書印がある古典籍を多く所蔵しているのも、その一端が窺われる。その中でも「**青谿書屋本土佐日記(桃 21—20)**」は藤原為家自筆本を極めて忠実に書写した転写本で、書写時期は寛永頃とみられている。亀鑑博士は「**古典の批判的処置に関する研究**」という画期的な業績を残された。この青谿書屋本は亀鑑博士の生涯の研究活動において記念すべき資料であり、「土佐日記」研究史上においても大きな意義を持つ資料である。

「九條」印

1929 年九條家からの売り立ての際に「池田亀鑑さんは、伊勢、大和、源氏、狭衣等の物語類を主に、数点の和歌関係を加えて 48 点……」を購入したことが『一古書肆の思い出』（反町茂雄著）に記されている。桃園文庫には「九條」印の押印されている和装本は 4 点が確認できている。その中に「**源氏物語系図 鎌倉初期写(桃8—142)**」がある。亀鑑博士はこの資料について「**源氏物語大成**」に、

鎌倉時代の初期を下るものではあるまい。その字形書風からすると平安朝に入るものかと思われる。と述べられているように、現存する源氏物語古系図中、最古の写本であろう。「九條」印のある他の資料はいずれも貴重な古写本であることが窺える。

「弘前医官渋江氏蔵書記」印

この印がある和装本は、和漢朗詠集、大和物語、十六夜日記など 4 点ある。森鷗外が晩年、江戸時代後期の儒者や文人の考証に熱心であった。そして渋江拙斎、伊沢蘭軒、北条霞亭などを題材にした小説を発表した。その小説「渋江拙斎」の中に、

拙斎は金を何に費やしたか。おそらくは書を購入と客を養ふとの二つの外に出でなかつただろう。渋江家は代々学医であつたから父祖の手澤を存じてゐる書籍が少くなかつただろうが、現に経籍訪古志に載つてゐる書目を見ても拙斎が書を買うために貲を惜しまなかつたことは想ひ遣られる。

という一文がある。この押印のある資料は、医官渋江拙斎が収集し所蔵していたことが窺える興味深い資料である。

「島原秘蔵」「尚舎源忠房」印と「吏部大卿忠次」印

この蔵書印がある「堤中納言物語」二本は、肥前島原侯松平忠房旧蔵本、姫路侯榊原忠次旧蔵本であることがわかる。両人は共に、時の大学頭林鶯峰と親しく、珍本がある場合、三者の間で貸借して転写するなど、親密であったことが窺われる。本書二本の書誌などを比較すると、榊原本が島原本を親本として書写したとは考えられないし、逆の可能性も少ない。おそらく祖本を同じくする兄弟関係にあったと見ることができる。寺本直彦氏は、

島原松平文庫旧蔵堤中納言と榊原忠次旧蔵本堤中納言とが、今日共に桃園文庫に収まるのは、まことに奇しき因縁というべきものであろう。（「東海大学桃園文庫影印叢書 堤中納言」解題）

と述べられている。

このように蔵書印をたどることによって、その書籍の伝来を明確にすることもでき、目録を採録する際には重要な項目と考え記述した。

これら以外に、注目すべき蔵書印について紹介しておく。

「阿波国文庫」「不忍文庫」印のある和装本 30 点、「黒川真道」「黒川真頼」印のある和装本 12 点、「清水浜臣」「南葵文庫」「勝安芳」「富岡百鍊」「三條西」「英王堂文庫」印などがある。

「広島高等師範学校図書之印」印の写しあり

この印の写しを持つ新写本は、「花鳥餘情」「源氏物語註」「源氏物語聞書」「源氏物語諸卷年立」の 4 点である。金子先生が書庫で熱心に資料に目を通されていた折、目を閉じられ、しばらく動きをとめられていた事があった。体調が悪いのかと心配で声をかけると「この資料は戦災で焼けてしまっている。」と言われた。新写本の原本がすでに散逸したものも少なくない中の一例である。

識語 亀鑑云

徒然草(桃 19—11)の識語に、

ト部家本徒然草(中略)徒然草最古の形態を存するものならん。ああ徒然草の成立の秘密つひに分明するか。ああ待望の日ついに到来するか。感無量、このよろこびを誰に告げむ。終夜眠る能はず。うきことのわれに多かる世にもこのよろこびもあり生くべかりけり 昭和二四年五月 亀鑑するす とある。このように亀鑑博士が古写本を入手した喜びや調査の覚え書などを、多く書き付けを残している。また亀鑑博士の父君である池田宏文氏や木田園子氏による新写本が多く桃園文庫に残されている。その臨写の折の原本の書誌事項や調査結果など詳細に記されている。

「土佐日記抄 北村季吟著」の識語

土佐日記抄は桃園文庫に 30 点所蔵しており、多くは寛永元年の刊記を持つ刊本である。これらの資料の大半には以下のように(校訂書入などを行なった人物と年号のみを抽出)識語を有している。「寛政四年 宣長」「寛政九年 近麿」「寛政十一年 貞菅氏」「寛政十二年 堀口光重」「享和五年 橘長純」「文化元年 田中大秀」「万治三年 浜臣」「文化五年 根岸義輔」「天保十二年 本居永年」「安政六年 間宮永好」「明治十七年 小中村義象」「明治二十年 鉄斎」など代表的なものを挙げてみた。これによって江戸時代から明治頃の「土佐日記」の注釈の歴史が読み取れるのではなかろうか。

補修のある 2 点の資料

「源氏物語 宿木巻」(桃 6—138) この資料には珍しい補修の跡が残っている。石田穰二先生からも依頼があり、国立国会図書館資料保存課の補修を専門にされている方々に、この資料を持参し、見ていただいた。一紙を表裏二面に剥ぎ分け、この間に補強の紙を入れ、もとの一葉に復原する「アイハギ」と呼ぶ

持術であることが確認できた。石田先生は影印叢書の解題に『こうした補修の跡をとどめた写本を実見したのは、本書がはじめてで唯一の例である。』と述べられている。

「古今和歌集」(桃 26—6)

この資料はもと袋綴であったものを、補修のため厚地の補強の裏紙を貼り、折本に改装したものと思われる。そのため現在みられる装幀には、錯簡が生じている。幸い欠落部分はないものの、利用する際には十分留意していただきたい。

10 結び

1970 年の秋、石井庄司先生の授業の冒頭で、「日本文学の古典籍の宝庫というべき桃園文庫というものが、そこには国宝に匹敵するような資料も含まれている。近々東海大学の所蔵となる可能性が大である。」と興奮気味に語られた。この時私は、初めて桃園文庫という存在を知った。翌年 4 月に本学の事務職員として採用になり、図書館に配属となった。以来 2014 年 3 月で退職するまで桃園文庫の整理に係って来た。

蟹江先生からは「日本文学科卒業以来、図書館司書として定年を迎えるまで、終始桃園文庫の分類、整理から目録作成に至るまで、生涯の生業(なりわい)と心得て励み続けた村山重治氏の努力と忍耐あらばこそ、今日の完成を見たものと心からの感謝の意を表したい。」と最大の賛辞をいただいた。金子金治郎先生(1999 年没)からは、奥書・識語に書き残された書名や人名の索引も必ず目録下巻に編集するよう厳命があった。多くの時間を費やしたが、ようやく金子先生の意志に辿りつくことができた。2013 年 6 月 22 日に諏訪湖が一望できる金子先生の墓前に鍛冶先生、早乙女氏、遠藤氏と共に目録完成の報告をすることができた。感無量であった。

歴代の館長や上司にご理解をいただき、整理の環境を常に整えていただいた。一方、同僚や図書館員らの支援があって『桃園文庫目録上・中・下巻』の完成を見ることができた。ここに感謝の意を表したい。

(むらやま・しげはる 前付属図書館図書課長)

*再掲にあたっては、年次日付等の漢数字は算用数字に改め、一部、体裁等に修正を加え、また今回展示された書名と分類番号をゴシック体にした。(志水)



書庫で調査中の村山前課長(2012 年 3 月 15 日撮影)

展 示 目 録

1 桃園文庫と桃園文庫目録

蔵書（コレクション）は、ただ所蔵していればいいわけではない。所蔵したものを財産として有効に用いるためには、まず目録がなくってはならない。『桃園文庫目録』のいきさつについては、本冊子に収めた、村山前課長の一文を参照されたい。『桃園文庫目録』は展示したハードカバー版のほかに上・中巻は簡易装丁版も作られた。この目録が製作されるまでに作られた作業用の目録も紹介しよう。あわせて桃園文庫について池田亀鑑博士自ら語った一文を載せる『花を折る』、また村山前課長の一文が掲載された日本文学科が発行する機関誌『湘南文学』も紹介する。桃園文庫に深くかかわった蟹江先生の退職記念号に寄せられた一文である。

1- 1 桃園文庫目録上・中・下（1986・1988・2013 東海大学附属図書館）

1- 2 桃園文庫書名総目録（桃 47-480）

1- 3 桃園文庫書架目録（桃 47-479）

1- 4 『湘南文学』第 49 号（2014 東海大学日本文学会）

1- 5 池田亀鑑『花を折る』（1959 中央公論社）914.6/I

『桃園文庫目録』は上・中巻が和装本を、下巻が洋装本を中心として編まれている。和装本とは所謂写本・版本（板本）のことだが、本目録の特長はその書誌についてのみならず奥書・識語・刊記まで翻刻されて紹介してあることだ。書誌というのは、その本についての寸法や装丁、丁数（ページ数のこと）、蔵書印、書入等の外観的情報のことだが、「奥書」というのは、その写本がどのような過程で写されたのかなどの伝来情報であり、「識語」とは書写にあたっての書写者の覚書、「刊記」というのは版本の出版情報——今の「奥付」——である。例えば、桃園文庫を代表する写本、青谿書屋本土佐日記の項目には、

土 左 日 記 写本 一冊 桃 21 20*

紀貫之著 胡蝶装 紙表紙（金・銀泥による霞・野毛文様に金銀切箔散らし） 雁皮紙 17.2×15・9 糎[†] 9 行 51 枚 外題中央 「青谿書屋」印

奥書「嘉禎二年八月廿九日以紀氏正本寫之一字不違不讀解事少々在之 權中納言（花押）」

（箱に「土佐日記 權中納言藤原爲家筆」棘舎文庫ラベル・「青谿書屋」「大嶋所藏」印あり）

*算用数字は原典では漢数字で表記されている。

[†]「cm」の漢字表記

とある。雁皮紙に 1 ページに本文 9 行で書写され、胡蝶装という形式で製本された 17.2cm×15.9 cm の大きさの写本で「青谿書屋」というところで保管されていた本であることがわかり、それは奥書によって、「嘉禎 2 年（1236）8 月 29 日に、紀貫之の自筆本——蓮華王院（京都の三十三間堂が蓮華王院本堂である）に伝わった本——を一字も違わず写したもののだが、読めないところも少々あった」と「権（權）中納言」氏が書写にあたって書いていることが判明する。これは箱に入れられて伝わり、それによって「権中納言」が藤原爲家さんであることが分かる。さらに「棘舎文庫」というところで保管されそれが大嶋氏の「青谿書屋」というコレクションに伝わったのが池田亀鑑博士のもとに至ったのだということが、『目録』から判断されるのである。『目録』を読むだけで、その本の様子がわかる。『桃園文庫目録』とは、「読んで楽しめる目録」でもあるのだといえよう。

2 桃園文庫の古典籍と影印叢書

東海大学付属図書館蔵桃園文庫として収蔵された古典籍をはじめとする資料は、社会にどのように還元されるのか。一つは研究者等への公開、閲覧という形があるけれども、より多くの人に見てもらうために「影印」を刊行する形がある。「影印」とは写本の画像のことで、桃園文庫の収蔵本の中でも価値の高いものを「桃園文庫影印叢書」として東海大学出版会（現在、東海大学出版部）から刊行した。最近は画像処理技術が進んで、カラー画像版も多くなったが、まだデジタル画像が普及する前の時代で、フィルム印刷によるモノクロ写真版が主流だった。

【源氏物語】

桃園文庫を代表する写本が「明融本 源氏物語」である。写本は書写者や所蔵者の名前からとって識別名とするが、「明融」とは、書写者の名前で「めいゆう」または「みょうゆう」と読み、冷泉家（藤原定家の御子左家の流れで歌学を伝える）に生まれた人物で父は冷泉爲和（文明 18 年 1486～天文 18 年 1549）だという。爲和は室町時代末期、今川義元や武田信玄が活躍していたころの人物である。

桃園文庫の「明融本」の価値は、藤原定家自筆写本の「源氏物語」の忠実なコピーというところにある。定家自筆本はほとんど散逸しているが、現存の「柏木巻」と桃園文庫蔵の「柏木巻」とを比較すると、忠実なコピーであることがわかる。そこで他の「桐壺」「簀木」「花宴」「若菜 上」「若菜 下」「橋姫」「浮舟」も定家本のコピーだと考えられる。本文研究において重要な価値を持つ写本である。

2- 1 東海大学蔵桃園文庫影印叢書 第 1・2 巻「源氏物語 I・II」

2- 2 明融本源氏物語（写本・桃 6－49）

【源氏物語系図】

村山前課長の一文にも紹介されているが、ここに紹介する「源氏物語系図」は撰関家（平安時代以来、江戸時代まで摂政・関白の任についた藤原家嫡流の家で五つの家があった）の一つである九條家に伝来した痕跡——蔵書印——のある巻物（「^{かんすほん}卷子本」という）である。

主人公誕生以前から語りだされ、多くの人と関わりを持ち、孫の代まで描かれる『源氏物語』は人間関係を把握するのが読んだだけでは困難である。そこで系図などが書かれてきた。この系図は鎌倉時代初期に写されたものらしく、古くから整理され読み解かれてきたことを示す一例として価値が高い。なお池田亀鑑博士によるこの系図研究の原稿が桃園文庫に残されている。

2- 3 東海大学蔵桃園文庫影印叢書 第 7 巻「源氏物語（宿木巻）・源氏物語系図」

2- 4 九条家本源氏物語系図（写本・桃 8－142）

2- 5 源氏物語古系図の成立とその本文資料的価値について（原稿資料・桃 47－129）

【源氏物語注釈】

「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」と藤原俊成（永久 2 年 1114～建仁 4 年 1204、歌人。藤原定家の父）が『六百番歌合』の判詞で述べたように『源氏物語』は古くから評価され、読まれ研究されてきた。桃園文庫には源氏物語の古注釈書も多く残されている。

2- 6 東海大学蔵桃園文庫影印叢書 第 4 巻「源氏小鏡・源氏抄」

2- 7 源氏小鏡（写本・桃 8－7）

2- 8 源氏抄（写本・桃 8－45）

3 池田亀鑑の仕事

桃園文庫の旧主、池田亀鑑博士はこれらの古典籍資料を用いてどのような研究をしたのだろうか。

【源氏物語研究と『源氏物語大成』】

「池田亀鑑」といえば『源氏物語大成』である。博士の代表的研究成果で「近代の源氏物語研究における金字塔」（三田村雅子）と評される。「校異編」と「索引編」、「研究資料編」、「図録編」で構成され、「校異編」は各写本間の字句の相異を示したもので、その資料が実際の写本や、その写本（現代写本）、青写真版、写真等で残されている。

〔古写本〕

3-1 旧紀州徳川家蔵源氏物語写本（写本・桃6-16）

〔現代写本〕

3-2 池田宏文写近衛家蔵源氏物語（現写・桃6-2）

3-3 鳳来寺本源氏物語（現写・桃6-3）

〔青写真版〕

3-4 源氏物語（青写・桃6-4）

〔写真版〕

3-5 木更津本源氏物語（各巻首尾）（写真・桃45-4）

3-6 伝実朝卿自筆源氏物語他（写真・桃45-9）

これらの写本を集め、比較し、ノートするところから、古典研究の第一歩は始まるのである。

〔研究の足跡〕

こうして、記録された各写本の本文の異同を検討しつつ、『源氏物語』本来の本文を推定復元してゆく。

その作業量は膨大で、亀鑑博士のみならず、家族や弟子からなるスタッフによって研究された。

3-7 源氏物語書目（目録資料・桃47-206）

3-8 源氏物語諸本校合ノート（研究資料・桃47-24~66）

3-9 源氏物語本文（原稿資料・桃47-71）

3-10 河内本源氏物語（原稿資料・桃47-72）付、担当者分類表（村山重治製作）

博士は最初河内本（鎌倉時代に源光行・親行の父子によって作成された校訂本文）と呼ばれる写本を基に本文復元を考えた（「校本源氏物語」。この底本となったと思われる博士旧蔵の河内本は現在天理図書館の所蔵となって「天理河内本」と呼ばれている）。桃園文庫には「校本源氏物語」の原稿用紙に記された「河内本源氏物語」の本文原稿が残されている。表紙に記された記事からこの原稿の作成担当者が以下の通りであることが知られる（調査、村山重治）。これにより亀鑑博士のスタッフがどう関与したかがわかる。（数字は担当した源氏物語の巻数）

【浄書】

木田園子（1・4・6・9・12~16・22~24・26・27・30・36・38・54）

池田宏文（2・10・20）

池田 皓（3・5・17・18・29・41）

岸田幸枝（7・8・19・33・40・42・43）

池田辰郎（11・25・28・31・32・37）

【判定・原本再調査】

石清水尚（1～5・7・9・10・13・15・20・22・26・29・31・39）
池田亀鑑（1・3・5・14・17・24）
桜井祐三（1～5・7・9・10・13・15～20・22・25・26・29・30・32・38・39・43）
岸田幸枝（1・4・5・7・8・10・11）
松村誠一（2～4・6・8・11・12・14～16・18・19・23・24・27・28・32・33・36・37・40～43・54）
池田 房（3・4・7～13・15・16・18・19・22・23・25～33・36～43・54）
清田正喜（3・4・7～13・15～20・22・23・25～33・36～42・54）
木田園子（5・9・12・14・17・24・54）
斎藤秀雄（6・8・11・14～19・23～25・27・28・30・32・33・36～38・40～43・54）
池田辰郎（6・43）

1「桐壺」2「帚木」3「空蟬」4「夕顔」5「若紫」6「末摘花」7「紅葉賀」8「花宴」9「葵」10「賢木」11「花散里」12「須磨」
13「明石」14「滯標」15「蓬生」16「関屋」17「絵合」18「松風」19「薄雲」20「朝顔」21「少女」(欠)22「玉鬘」23「初音」
24「胡蝶」25「蛭」26「常夏」27「篝火」28「野分」29「行幸」30「藤袴」31「真木柱」32「梅枝」33「藤裏葉」
34「若菜上」(欠)35「若菜下」(欠)36「柏木」37「横笛」38「鈴虫」39「夕霧」40「御法」41「幻」42「勾宮」43「紅梅」
44「竹河」(欠)45「橋姫」(欠)46「椎本」(欠)47「総角」(欠)48「早蕨」(欠)49「宿木」(欠)50「東屋」(欠)
51「浮舟」(欠)52「蜻蛉」(欠)53「手習」(欠)54「夢浮橋」

『源氏物語』巻名一覧

作業は昭和 11 年の 10 月から 12 月にかけて行われ、14 年 5 月に飯島本との校合（1～5・7・8・10・11・14）が行われている。

こうした作業の様子からは、家族の理解や弟子の献身に支えられて学問的成果が生まれ出る様子がうかがえる。献身とはいうが、弟子たちはこうした作業を通じて、写本を扱い、読み解き、正しい本文を求めてゆく技術^{スキル}を身に付け、さらにその弟子たちに伝授していったのだ。ある意味、現場で育成される職人的技術と言えよう。だからここには授業のみの関係や、人生の経過地点としての大学（大学院）という現代のビジネス的な——ドライな——関係をよしとする態度、あるいは単位取得や出席日数に追われ、教室に縛り付けられる学生の姿は見られない。さて、池田亀鑑博士や同時代の学者たちの遺産（研究スキル）は未来につながるであろうか。

【研究資料編など】

『源氏物語大成』はそもそも芳賀矢一（慶応 3 年 1867～昭和 2 年 1927、国文学者）の東京帝国大学退官記念事業として『源氏物語』の注釈書を作成する企画から始まった。作業を委嘱された博士は『源氏物語』の室町時代の注釈書である『花鳥余情』^{かちょうよせい}の研究からスタートさせたが、活字で出版された本の記述に納得できなかった博士は、その写本の研究に及び、注釈書よりも古い注釈書を一覽できる「古注釈集成」を作ることにした。さらに注釈に必要な本文研究の必要性を感じ、結局本文校訂作業に至ったのである。

3-11 花鳥余情（写本・桃 7－88）

3-12 花鳥余情（現写・桃 7－86）

この現代写本の祖本（元となった写本）が、広島高等師範学校蔵書で被災し失われた、村山前課長の記事中に見える金子先生のエピソード中の本である。

3-13 伝二條爲氏筆源氏物語系図（写真・桃 45－34）

【原稿・校正・刊行】

博士の本文研究は、ひとまず『校異源氏物語』として昭和 17 年 1942 に中央公論社から出版された

(全5巻)。しかし博士はさらに手を加え——この過程で明融本が資料として得られる——索引を作成し、研究過程で得られた成果をまとめ、系図や古注釈等の資料なども紹介すべく、『校異源氏物語』の補訂を「校異編」、以下「索引編」「研究資料編」「図録編」とまとめて、昭和28年1953から昭和31年1956にかけて『源氏物語大成』として中央公論社から出版した(全8巻「限定版」)。これは版を重ね、さらに昭和59年1984には全14冊に再編されて「普及版」として刊行されている。

『源氏物語大成』完成後、博士はそもそもの出発点であり、完成を見ることなく逝った芳賀矢一の墓前にその完成を報告している。

3-14 源氏物語大成 原稿(桃47-94・95)

3-15 源氏物語大成 校正ゲラ(桃47-100)

3-16 源氏物語大成(1971・中央公論社)

3-17 源氏物語大成出版芳賀矢一先生墓前報告祭に於ける祝詞文(桃47-195)

〔余 談〕

今年(平成27年2015)は、11代目市川團十郎没後50年にあたる。11代目市川團十郎は美貌で知られ、昭和15年1940に九代目市川海老蔵を襲名。太平洋戦争が終結した昭和20年に「助六」を演じて大ヒット。その海老蔵が昭和26年1951に『源氏物語』の光源氏を演じるようになった。そのころから「花の海老様」と呼ばれ、若い女性のアイドル的役者となって一世を風靡したのである。『源氏物語大成』が世に出る数年前に源氏ブームが湧きおこったのである。桃園文庫には、その時期に関わると思われる原稿がいくつか残っている。

3-18 源氏物語歌舞伎座で上演されるいきさつ(原稿・桃47-191)

3-19 源氏物語と歌舞伎(原稿・桃47-207)

これは池田亀鑑博士の原稿ではなく、折口信夫(明治20年1887～昭和28年1953、国文学者)のものらしい。博士は折口博士によって慶應義塾大学に招聘されて講義も行っており、交友関係があった。ドイツ文献学の影響を受けた池田亀鑑博士に対し、民俗学的手法を得意とする折口博士との組み合わせが興味深い。

【伊勢物語研究と『伊勢物語に就きての研究』】

『源氏物語大成』編纂作業中、博士は『伊勢物語』の研究成果も発表している。博士の学問は、芳賀矢一が国文学研究に導入したドイツ文献学方法を受け継ぎ、信頼ある写本間の異なった箇所(「異文」)を比較検討して原型(祖本本文の様態)を明らかにする、本文批判を基軸とした文献学的研究の実践と理論体系化を目指した。『伊勢物語』の研究はその過程における研究成果である。

3-20 東海大学蔵桃園文庫影印叢書 第6巻「伊勢物語」

3-21 伊勢物語 (写本・桃2-1)

3-22 伊勢物語(写本・桃2-14)

3-23 伊勢物語(現写・桃2-8)

3-24 冷泉爲相本伊勢物語(現写・桃2-30)

3-25 伊勢物語に就きての研究 校本編再校ゲラ(再校刷・桃47-1)

3-26 伊勢物語に就きての研究〔校本編・研究篇〕(1933・大岡山書店)

【土佐日記研究と『古典の批判的処置に関する研究』】

博士は、古典作品の研究方法として本文批判と本文鑑賞の二段階を置くが、その第一段階である「本文批判」の理論体系化を、写本の伝わり（伝本状況）が古典作品中最も良好である「土佐日記」の紀貫之自筆本再建によって試みた。その研究成果が『古典の批判的処置に関する研究』である。まだ複写機もない時代（現在普及している PPC 式複写機の開発は昭和 26 年 1951）、校異を取るときには写本名をゴム印にしたり、用紙を印刷したりなどの工夫をした上で、手で書き写した。

- 3-27 土佐日記校異 1～5（研究資料・桃 47-344）
- 3-28 土佐日記諸本との校合記録（研究資料・桃 47-348）
- 3-29 原本再建のための土佐日記諸本校異（研究資料・桃 47-313）
- 3-30 蓮華王院本を忠実に写した爲相本の本文（原稿資料・桃 47-355）
- 3-31 え江の調書（研究資料・桃 47-282）
- 3-32 古典の批判的処置に関する研究第二部（原稿・初校刷・再校刷・桃 47-315・316）
- 3-33 古典の批判的処置に関する研究（1941・岩波書店）
- 3-34 東海大学蔵桃園文庫影印叢書 第 9 巻「土佐日記」
- 3-35 青谿書屋本土佐日記（写本・桃 21-20）
- 3-36 御物本土佐日記（写真・桃 45-44）

【徒然草研究】

博士は『徒然草』の研究も企図していたらしい。いくつかの写本と、作成された研究資料が残っている。

- 3-37 東海大学蔵桃園文庫影印叢書 第 8・13 巻「徒然草 I・II」
- 3-38 徒然草（写本・桃 19-8）
- 3-39 徒然草（写本・桃 19-12）
- 3-40 徒然草（写本・桃 19-33）
- 3-41 つれつれ草校異 1～3（研究資料・桃 47-272）
- 3-42 つれつれ草校本 上・下（研究資料・桃 47-273）
- 3-43 校本徒然草 上・下（原稿資料・桃 47-274）



桃園文庫保管庫

顕彰

池田亀鑑賞

池田亀鑑賞設立にあたって

池田亀鑑生誕の地(鳥取県日野郡日南町)から、没後 55 年となる今年(2010 年)、新たに「池田亀鑑賞」が誕生することになりました。池田亀鑑文学碑の『学才にあらず 閥派にあらず たゞ至誠にあり』の碑文が文字通り甦生されて、中古古典文学研究などの奨励となり、源氏物語千年のかがやきのような光彩を放つ賞として末永く継承したいと考えています。「池田亀鑑賞」創設にあたって、選考委員をはじめ後援・協賛いただいた関係各位に深謝いたします。

池田亀鑑文学碑を守る会 事務局長 久代安敏

趣旨

「池田亀鑑賞」は、文学の研究基盤を形成する上で、顕著な功績のあった研究に対して贈るものです。その地道な努力を顕彰し、さらなる成果の進展を期待する意味を込めています。「池田亀鑑賞」は、伝統ある日本文学の継承・発展と文化の向上に資することを目的として、池田亀鑑生誕の地である日南町と池田亀鑑文学碑を守る会が創設しました。

経緯

『学才にあらず 閥派にあらず たゞ至誠にあり』の碑文が刻まれた池田亀鑑文学碑は、池田亀鑑生誕の地(鳥取県日野郡日南町神戸上)に近い、旧日南町立石見東小学校にあります。この文学碑は、「池田亀鑑先生文学碑建立発起人会」により、池田亀鑑没後 12 年の祥月命日である昭和 43 年(1968 年)12 月 19 日に建立されました。その後、「池田亀鑑文学碑を守る会」の事業活動によりプラスチック板に書かれていた池田亀鑑の略歴紹介が、平成 21 年(2009 年)11 月 3 日に石碑に建て替えられました。平成 22 年(2010 年)3 月 13 日に日南町で開催された講演会「もっと知りたい 池田亀鑑と『源氏物語』」が契機となり、日南町と「池田亀鑑文学碑を守る会」が平成 23 年(2011 年)5 月 2 日に「池田亀鑑賞」の設立を実現しました。

池田亀鑑賞公式 HP より (http://www.shintensha.co.jp/sp/iked_a_kikan/index.html)

受賞作品

- 第 1 回受賞 『宣長の源氏学』(杉田 昌彦 新典社 2011)
- 第 2 回受賞 『源氏物語古注集成第 23 巻 林逸抄』(岡嶋 偉久子 おうふう 2012)
- 第 3 回受賞 『狭衣物語 受容の研究』(須藤圭 新典社 2013)
- 第 4 回受賞 『菅原道真論』(滝川幸司 塙書房 2014)

ゆふかほ

(河内本)

六条わたりの脚しのひありきのころ内よりまかて給なかやとり大貳のめのとのいたくわ
 つらひてあまになりにけるとふらはむとて五条なるいゑたつねておはしたり御くるまい
 へきかとはさしたりければこれみつめさせてまたせ給ほとむつかしけなるおほちかなとみ
 わたし給へるにこのいへのかたはらにひかきといふものいとあたらしくしてはしとみ四五
 けんはかりあけわたしてすたれなとしろすしけなるにおかしきひたひつきのすきかけ
 あまたみえてのそくたちさまよふらんしもつかた思やるそあなかちにたけたかき心ちすれ
 といかなるものつとへるならんやうかはりておほさる御くるまもいたうやつしきし
 おはせ給はすたれとかしらんとうちとけたまひてすこししのそきたまへればかとはしと
 みのやうなるをしあけたるみいれのほとなくものはかなきすまひのさまをあはれにいつ
 こをすしてとおほしなせはたまのうてなもおなしことなりきりかけたつものにいとあをや
 かなるかつらの心ちよけにはひかゝれるにしろきはなそをのれひとりゑみのまゆひらけた
 るおちかた人にも申すときちすさ給に御すいしんつぬてかのしろくさけるをなんや
 ふかほとは申侍名は人めきてかうあやしきかきねになんさき侍と申けにいとこいゑち
 むつかしけなるわたりのこのものあやしきうちよろほひてむねノしからぬのきの
 つまことにはひまつはれるもくちをしのはなのちきりやとてひとふさをりてまいれとおほ
 せたまへはこのをしあけたるかたに入てをるすすかにされたるやりとくちにきなるすし

16

15

14

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1